



マイコプラズマ肺炎について

朝晩が涼しくなり、かぜの流行が心配されますが、本校の欠席は例年より少なく、元気に活動している子どもたちを多く見かけます。

しかし、最近、マイコプラズマ肺炎での欠席が時々見られます。

国立感染症研究所感染症情報センターによると、全国的に7月～9月下旬までで患者数の累計が急増し、累計8900人を越え、過去10年間で最多だそうです。年齢別に見ると0～14歳が全体の81%を占めています。

- ・マイコプラズマ細菌が原因
- ・咳くしゃみなどの飛沫感染や接触感染
- ・発熱、倦怠感、咳が長引く
- ・抗生物質が効きにくい

これからの季節、まだ感染の可能性があります。
手洗い・うがい、咳が出るときにはマスクを着用することなどを励行してください。

また、家族に感染者がいるときはできるだけ接触を避け、未然に感染を防いでください。



【出席停止となる病気】～学校保健安全法施行規則より～

- 第1類：エボラ出血熱、クリミア・コンゴ出血熱、マールブルグ病、ペスト、ラッサ熱、ジフテリア、南米出血熱、痘そう、急性灰白髄炎、重症急性呼吸器症候群(SARS)、鳥インフルエンザ
- 第2類：インフルエンザ、百日咳、麻しん(はしか)、結核、流行性耳下腺炎(おたふく)、風しん(3日ばしか)、水痘(みずぼうそう)、咽頭結膜熱(プール熱)
- 第3類：腸管出血性大腸菌感染症、流行性角結膜炎(はやり目)、細菌性赤痢、コレラ、急性出血性結膜炎、腸チフス、パラチフス、その他の感染症

★本校では、連絡のあった日から出席停止となります。診断後は早めに御連絡ください。★



さわやかコミュニケーション

～7/1学校保健員会「さわやかコミュニケーション」親と子のコミュニケーションを考えるより～

学校生活の中で、子どもたちの会話を聞いていると「わかんない」「別に」「どっちでもいい」というようなあいまいな返事を聞くことがあります。

コミュニケーションとは、ことばや行動などで自己表現をして自分をきちんと伝え、相手も大切に作るやりとりのことです

いろいろな場面で、「どう感じるか」は一人一人違います。それらを伝えたり、聞いたりして、自分を知ってもらったり、相手を知ったりすることは楽しいことです。子どもたちにも日々の生活の中でいろいろな人と関わって、コミュニケーション力をつけていってほしいと思います。



自己表現（送り手のスキル）

1. 自分の気持ちや考えをありのまま受け止める。（今こんな気持ち、〇〇だと思う）
2. その思いを自分の知っている表現方法で、相手にどう伝えるか工夫し表現してみる。
3. 自分を表現したときの影響や効果を考えて、表現をいつもと変えたりしてみる。

自己表現のポイント

自己表現の結果、相手に理解されることもあれば、理解されないこともあります。理解されないことは自分のせいでもなく、相手のせいでもなく、当たり前のことです。（そう思った方が気持ち楽になります。）自分を理解してもらうには、自分を素直に表現して、相手にも耳を傾け理解しようとする姿勢が大切です。

児童期（小学生）の発達について

- ・初めての学校生活で、勉強や運動に一生懸命頑張ろうとする時期。
- ・他の人からどう見られているかを気にする時期。
- ・人の気持ちを予測することもできるようになり、思いやりも身につきますが、勘違いから友達とトラブルを起こしやすい時期でもある。



★子どもたち同士のトラブルになるような出来事から、コミュニケーションのスキル（自分の気持ちを伝える、相手の気持ちを考える、仲直りの方法など）を学ぶ時期でもある。

トラブルが発生したとき、

- ・その時自分はどうしたのか、どうしたかったのかを話せるでしょうか？
- ・その時相手はどうしたか、どうしたかったのかを考えることができるでしょうか？

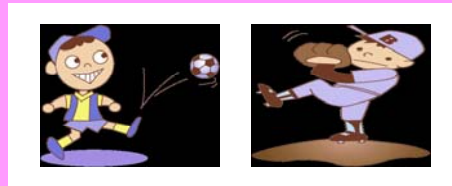
親子でやってみよう！ 「自己表現力をアップさせる・インタビューゲーム」

<やり方> 身近にあるもの2つのうち好きなものを選んでもらいます。そして、お互いに必ず好きな理由を2つ言ってください。

<問題づくりのポイント>

似たもの同士を比べるとよい練習になる。

例：クッキーとせんべい、みかんとバナナ、野球とサッカー、犬と猫 など



<答え方> いい答え◎ 「①▲▲だから◆が好き。」 「②●●だから◆が好き。」
言い直したい答え× 「好きだから」「考えたことない」



こんなゲームをお子さんと一緒にお風呂に入った時、出かける時の車内などでやってみてはいかがでしょうか？

身近なものから取りあげてゲームを繰り返していくと、自分の気持ちや意見を考えることによって、自信がつき、相手に伝えようとする気持ちも湧いてきます。子どもたちがよく口にする「ただ何となく」「友達といっしょでいい」ではなく、まずは、自分の答えを持つことが大切です。